

RED STONE 新たなる冒険者たち

まっき～

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ここは、農業と交易が発展した文化の中心地・フランデル大陸の極東地方。この地方ではRED STONEの伝説がある。

人々はRED STONEを求めて旅をする。これは、RED STONEを追い求める新たな冒険者のお話。

この小説は、オンラインゲーム、RED STONEを元に作っています。

ストーリー沿いになるかはまだわかりませんが、どうぞよろしくお願いたします。

※しばらく更新停止します

読んでる方が少ないことや、趣味の暴発なので、まとまりがなくなってしまうので、すいません。

目次

プロローグ	1
下準備	9
人助け	14

プロローグ

フランデル大陸の極東地方。この地方では、約500年前に「RED STONE(レッドストーン)」と呼ばれる赤い石が空から落ちて来たと言う伝説がある。そして、それを手にした者は、不老不死と莫大な富を得られると言われているが、実際にそれに触れた者は、誰もいなかった……

マナ

「だってさ〜」

ラン

「そんな話があるんだ〜」

ランはマナからRED STONEの伝説の話を聞いていた。

ラン

「それで、そのRED STONEはどうなったの？」

マナ

「さっきの話の通りだよ。まだ誰も見つけてないんだってさ〜」

ラン

「そうなんだ〜。なんか憧れるね〜」

マナ

「それで相談なんだけどさ…」

ナイト

「冒険家デビューするだって？」

ラン

「うん!!」

マナの影響ですっかりRED STONEに魅入られていたランは、兄であるナイトに冒険家デビューしたいと言っていた。

ナイト

「ラン、わかっているとは思うけど、とてつもなく危険だぞ!!それに、迷信かもしれないだろ?」

ラン

「そこは百も承知だよ。私はその伝説を追いかけたい!!」

ナイトはランがこんな妹ではなかったはずだと頭を抱えていた。

ナイトの言う通り、冒険家と言うのはつまるところ、死と隣り合わせの職業だ。

ランをそんな世界に放り込みたくないと内心すごく焦っていた。

ラン

「それでさナイト兄、私と冒険家になってくれない?」

ナイト

「無茶言うなよ…。そもそもランにそんな危ないことをさせたくないんだけどさ」

ピンポーン…

不意に家のチャイムがなった。

???

「おくつす!!ナイトいるか?暇だから遊びに来ちまったぜ!!」

ナイト

「この声は、ファイか?」

ラン

「多分ファイ兄だね」

ナイト

「ファイ、鍵なら開いてるから来てくれて構わないぞ!!」

ファイ

「そうか、それじゃ、邪魔するぜ」

ラン

「そうだ、ファイ兄」

ファイ

「なんだい、ランちゃん？」

ナイト

「おいおい、まさかファイにもその話するのか？」

ラン

「いいじゃん、別にさ」

ファイ

「どうしたんだ、二人して？」

ラン

「実はさ…」

数分後

ファイ

「なるほどね」

ラン

「それでさ、ファイ兄も一緒に冒険家にならない？」

ナイト

「ちよつと待て、それだと俺も冒険家になる前提じゃないか!!」

ファイ

「えーつと、何から話すりゃいいんだか…」

ナイト、ラン

「??」

ファイはナイトとランになにから伝えるべきか戸惑っていた。

ファイ

「ナイトにランちゃん、先に謝るわ…」

ナイト

「なんだよ突然、らしくない」

ファイ

「実はさ……」

ナイト、ラン

「……」

ファイ

「俺既に冒険家なんだわ」

……沈黙……

ナイト、ラン

「はあああ〜（ええええ〜）!?!」

部屋の中に二人の絶叫が響いた。

ファイ

「おいおい、そんなに驚くことか？」

ナイト

「そりゃ、身近に冒険家いたらな!!」

ラン

「なんで秘密にしたの？」

ファイ

「いや、秘密にしてた訳じゃないんだけどな……」

ラン

「そうなの？まあ、それはおいといて、ファイ兄、どうやったら冒険家になれるの？」

ナイト

「だから、冒険家になる前提で話を進めるな!!」

ラン

「いいじゃん、ファイ兄も冒険家なんだから」

ファイ

「それなら、ブルンネンシティグの冒険家協会に行くといいぞ」

ナイト

「ファイまでなに言ってるんだ!!別に冒険家になるつもりはないんだぞ」

ナイトはランとファイが予想以上に意気投合して困っていた。

その時

ピンポーン

再び玄関のチャイムがなった。

ナイト

「今日は客が多いな。また誰か来たぞ…」

ラン

「もしかしてマナかな?」

マナ

「だいせいからい!!」

ラン

「あがっていいよ」

マナ

「はくい、おっじゃまっします!!」

ナイト

「元氣いいな、なにがあつた?」

マナ

「ん?ランに冒険家にならないって進めただけだよ?」

ナイト

「ランがああなったのはお前が原因か、マナ!!」

元凶は身近にいたらしい。

マナ

「あはは。それで、聞いてみた？」

ラン

「それがね、ずっと止めてくるんだよ」

ナイト

「そりや止めるぞ。そんな危ないことさせたくないしな」

ファイ

「ナイト、お前もしかして、シスコン？」

ナイト

「誰がシスコンだ!!だいたい、ただの夢物語だろ？」

ラン

「いいじゃん、かわいい子には旅をさせよって言うじゃない？」

ナイト

「別にかわいいとは思わないけどな」

ラン

「ちよつと待って、それは実の妹にたいしてひどくない？」

ナイト

「それより、冒険家になんかなるつもりは無いし、ランを冒険家にするつもりもない」

ファイ

「やっぱりシスコンだな (ボソツ)」

マナ

「そうだね (ボソツ)」

ナイト

「なにかいったか？」

ファイ

「気のせいだ、ナイト。でもよ、あっち見てみるよ」

ナイトはその方向を見る。

マナ

「でき、新しい話を見つけてきたんだけど…」

ラン

「本当に？どんな話？」

マナ

「実はね…」

再び盛り上がってるランとマナの姿

ファイ

「こりやもう断れないな」

ナイト

「いや、断れないことはないが…」

ラン

「ねえねえ、ナイト兄」

ナイト

「なんだよ、ラン」

ラン

「一緒に冒険家になってくれないと、ナイト兄のこと嫌いになっちゃうぞ!!」

その一言にナイトは吹っ切れた。

ナイト

「わかったよ、冒険家になりやいいんだろ、なりやよ!!」

ラン

「ありがと、ナイト兄!!」

そんなやり取りのなか、ファイとマナは…

ファイ

「それで、マナちゃんは、何を助言したんだい？」

マナ

「さっきの一言だよ。これで、ナイトさんを冒険家にして、シスコンの証明までできたんだから」

ファイ

「流石だね、マナちゃん。ナイトの性格よくわかってるな」

マナ

「そりゃ、だてにランと遊んでなかったからね」

ファイ

「ま、これでブルンネンシュティグにいけるわけだ」

マナ

「ついに冒険家かぁ。楽しみだな」

こうして、シスコン1名（誰がシスコンだ!!）、ブラコン1名、現冒険家1名、呆けた人物1名（あたしの説明ひどくない？）はブルンネンシュティグへと向かうのであった。

下準備

ナイトの家から目的地であるブルンネンシュティグは少し距離がある。

ファイは別として、ナイト達は冒険者ではないため、武器を持っていない。

もし敵に襲われたりするとかなり危険だ。

ファイ

「ナイト、お前なんも準備してないんだな」

ナイト

「そんなこと言われても、俺は冒険家になるつもりは無かったからな。こうなった原因のランに言ってくれ」

ラン

「わ、私の責任なの？」

ナイト

「そりやそうだろ」

ファイ

「取り敢えず、一旦俺の家に行くぞ」

というわけで、ナイト達はブルンネンシュティグに向かう前に一旦ファイの家に行くことになった。

ファイ

「取り敢えず上がりな」

ナイト、ラン、マナ

「二「お邪魔します（しまゝす!!）」」

1人だけ無駄にテンションが高いが、気にしないでおこう。

ファイに案内されて着いたところは、何やら物騒な物が置かれていた。

ファイ

「ここに武器がいくつかあるから、自分にあつたものを見つけてくれ」
ナイト

「なあ、ファイ。これどうしたんだ？」

ファイ

「前少しだけ冒険家やってたときに見つけた武器だ。あんまりいいのは無いけどな」

ナイト

「そうか…」

ラン

「あつ、私これにしようかな」

そうやってランが手に取ったものは小柄な弓と矢、そして槍だった。

ファイ

「へえ〜。ランちゃんはそれにするんだ」

ラン

「うん。元々槍術とか弓道とかやってたからね」

mana

「あつ、あたしこれ〜」

ナイト、ファイ、ラン

「「はあ（えっ）？」」

なんとmanaが取ったのは笛だった。

そう、笛だったのだ。

大事なことなので2回言っておいた。

ナイト

「おい、そんなんじゃ戦えるのか？」

マナ

「さあ？でも、武器のところにおいてあるなら大丈夫じゃない？」

マナがそう言うと、ナイトは軽くファイを睨んだ。

ファイは気まぎれになったのか、ナイトから目をそらした。

ラン

「ねえ、マナ。笛って演奏用の道具であって、武器では無いんじゃない？」

マナ

「大丈夫、きっとなんとかなるって」

ラン

「そ、そうかな？」

ランもマナの説得に失敗したようだ。

ファイは仕方なくマナに笛を渡す。

ファイ

「ナイトはどうする？」

そういうと、ナイトは武器をじっくりと考え始めた。

……数分後……

ナイト

「よし、これにしよう」

ナイトが選んだのは大剣と片手剣だった。

ファイ

「なんというか、お前らしい気がするよ……」

ナイト

「そうか？」

ファイ

「まあいいか。これで全員決まったな」

ナイト

「1人だけ怪しいけどな…」

マナ

「ちよつと!!あたしのこと言ってるの?」

ファイ

「い、いや、だれもマナちゃんのことを言ってる訳じゃないって」

マナ

「……本当?」

ラン

「ほ、本当だよ」

マナ

「ふうん…」

マナは若干ふてくされているが、取り敢えずナイト達の武器が決まった。

ラン

「そういえば、ファイ兄の武器ってなんなの?」

ファイ

「俺か?おれはこれさ」

取り出したのは複数の短刀だった。

ファイ

「これを相手に向かって投げるとだ」

ナイト

「でも、それだと短刀が無くなったら戦えないだろ?」

ファイ

「それに関しては問題ないぜ。これでも一応武術には長けているつもりだからな」

ファイは短刀が無くなったら素手で挑むつもりなようだ。

マナ

「決まったんなら早く行こうよ!!もう待ちくたびれたよ」

ファイ

「そうだな。それじゃ、ブルンネンシュティグに向けて、出発!!」

彼らは再びブルンネンシュティグへと旅立った。

……はずだった。

ナイト

「なあ、食べ物とかって持ってきてるか?」

ファイ、ラン、マナ

「「あっ……」」

ナイト

「忘れてたか……。とりあえずどこかで食べてから出発するぞ」

結局彼らがブルンネンシュティグへと旅立つのは、もう少しだけ先
のようだ。

人助け

マナ

「ねえ、まだなの？」

ナイト達はブルンネンシユテイグへと向かって歩いてきた。

地図を見ながらゆっくりと進んでいたため、既に3時間近くかかっていた。

ナイト

「何回その言葉を言ったか覚えてるか、マナ？」

マナ

「さ、3回目？」

ナイト

「いや、14回は言ってるぞ。それに、こうなるってことをわかってた
だろ？」

マナ

「わかんないよお」

ラン

「全く、体力ないね、マナは」

マナ

「うるさいなあ、みんなと違って運動とかやってこなかったから仕方
ないじゃん!!」

ファイ

「まあまあ、そろそろ休むかい？」

マナ

「うん!!」

ナイト

「そういうときは元気いいな…」

距離的にはあと少しで着くのだが、取り敢えず1回休憩することに

なった。

マナ

「ふう、やっと休める〜」

ラン

「もう…。マナはもう少し体力つけなよ」

マナ

「うぐう…」

ファイ

「ナイト、あとどのくらいで着きそうなんだ？」

ナイト

「簡単に予想すると、あと1時間半くらいか？」

ファイ

「なるほど…。ん？あれは…」

ファイはなにかを見つけたのか、その方向に向かっていった。

ナイト

「どうしたんだ、ファイ？」

ファイ

「……怪我人がある」

ナイト

「なにつ!？」

ナイト達はその怪我人のところに行った。

ファイ

「大丈夫ですか？」

輸送員

「……はい。ただ、届け物を盗まれてしまいました」

ナイト

「なんだと!？」

輸送員

「取り返しに行きたいのは山々なのですが、怪我の影響で上手く動けません」

マナ

「よし、あたしたちに任せて、取り返してあげる!!」

ナイト

「俺も同意見だ。話を聞いて見捨てるなんて出来ない」

ラン

「それで、盗まれた届け物はどこに？」

輸送員

「ここから南の方向に逃げました。まだあまり離れてはないと思いますが…」

ファイ

「わかった。すぐに行ってくる」

ナイト達は、盗人の逃げた方向に走っていった。

盗人

「やったな、あのノロい運び屋からいいもの盗んできたぜ」

下っ端

「流石は兄貴!!盗むことにおいて右に出るやつはいないっすね!!」

盗人は少し離れたところでゆっくりと南下していた。

ファイは話し声に気付き、ナイト達に話しかける。

ファイ

「ナイト、どうやらそこに盗人がいるみたいだ」

ナイト

「走ってすぐにでも追い付くか？」

ラン

「でも、相手は盗人だよ。すぐに逃げられちゃうよ」
ファイ

「そうだな…。よし、マナ」

マナ

「なに、ファイさん？」

ファイ

「これから指示することを行ってくれ」

マナ

「？別にいいけど…」

ファイはマナに指示をして、マナははじめは拒絶していたが、仕方なく引き受けた。

マナ

「あとで何かおごってね!!」

ファイ

「出来る範囲でなく」

そういうと、マナは盗人に近づく。

マナ

「あの、その人」

盗人

「ん？なんだい、お嬢ちゃん？」

マナ

「(うわ、やっぱり引き受けなければよかった…)なにを持っているんですか？」

下っ端

「よく聞いてくれた、お嬢ちゃん。これは兄貴が盗んだアイテムです」

盗人

「まだ中身は確認してないが、きつといいものに違いない」

マナ

「そ、そうなんですか…」

マナは盗人達にかなり引きながらも、作戦を実行していた。

マナ

「あの、それを開けるのにいい場所があるんですけど、よかつたらどうですか？」

盗人

「おお、それなら行かせてもらおう。案内してくれ、お嬢ちゃん」

マナ

「う、うん!!」

マナは盗人が進んでいた方向から反対方向に動き、盗人が着いてくる。

そして、指示された方向へと進み続ける。

盗人は手に盗んだものを持っている。

マナ

「いまだっ!!」

盗人

「うおっ!?!」

マナは持っていた笛で盗人の頭を叩く。

突然のことに驚いたのか、盗人は手から道具を落とし、マナが拾い上げて逃げる。

盗人、下っ端

「待てえ!!」

マナ

「きゃああああ!!」

ファイ

「お疲れ様、マナちゃん」

追いかけることで注意力が散漫している盗人達にむかつて、ファイは持っていたダートを投げる。

そのダートは的確に盗人に命中した。

盗人、下っ端

「ぎゃああああ!!」

ラン

「さあ、年貢の納め時よ!!」

ナイト

「なに言ってるんだ、ラン…」

ラン

「いや、ちよつと言ってみただけ…」

盗人

「なに言ってるんだ!!捕まるのはあの娘だろう」

下っ端

「そうだ!!あの娘は兄貴の盗んだ道具を盗んだんだ!!」

ナイト

「なるほど、はじめにあの道具を盗んだのはお前らか」

ナイト達は、勝手に自爆した盗人達に呆れていた。

ファイ

「そんなお前らに残念なお知らせだ。あの道具は取り返すように依頼されたものだ。それに、あの子は俺たちの仲間だ」

ラン

「さてと、しっかり捕まってもらおうよ!!」

盗人

「くそ、分が悪い、逃げろ!!」
下っ端

「あつ、兄貴!!」

盗人は隙をついて逃げてしまった。

結果的に考えれば道具を取り返せたから問題はないが。

ファイ

「それじゃ、あの輸送員さんのところに戻りますか」

ナイト

「そうだな」

ラン

「じゃあ、私はマナを呼んで来るから」

しばらくして、ランがマナをつれてきた。

マナ

「もう、2度とやりたくない……」

ファイ

「ごめんね、マナちゃん」

マナ

「……はやく行くよ!!」

輸送員は心配そうな表情でナイト達の方向を向いていた。
ナイト達が到着し、輸送員は安堵の表情を浮かべた。

輸送員

「ありがとうございます!!」

ナイト

「いえ、気にしないでください」

輸送員

「それと、もう一つお願いがあるのですが、この道具をブルンネンシユ
ティグの協会へ届けてほしいのです」

ファイ

「それくらいならお安いご用さ」

ラン

「私達に任せてください!!」

ナイト達は輸送員の荷物を持ち、再びブルンネンシユティグへと進
み始めた。